

海	外	&
論	文	
レ	ポ	

社会的企業サンダーランド 訪問記 (1)

中川雄一郎 (明治大学 / 協同総研)

はじめに：3つの非営利・協同組織を訪問

私もメンバーの一人として参加している「非営利・協同組織研究会」(研究課題名「ポスト福祉国家における非営利・協同組織の社会的、経済的役割に関する日欧米比較研究」)が今年度も私に「イギリスにおける社会的企業調査」の機会を与えてくれたので、私は、同研究会メンバーの押尾直志教授(明治大学商学部)と共に それに「コミュニティ住宅開発」の調査のために訪英していた飯田和人教授(明治大学政経学部)も同行して およそ10日間にわたって、イングランド北東部を流れるティン川流域のサンダーランド市で独創的な事業活動を展開している「社会的企業サンダーランド」(SES)、ロンドンの東部に位置するタワー・ハムレッツ自治区における女性たちの経済的、社会的自立を支援し、コミュニティの再生を目指して活動しているコミュニティ・ビジネスの「アカウント3」(Account3)そして中世都市の観光地で有名なヨークに本部を置く「ノース・ヨークシャー・ボランティア組織フォーラム」(North Yorkshire Forum for Voluntary Organisations: NYFVO)の3つの非営利・協同組織を訪ねた。これら3つの非営利・協同

組織はそれぞれ特徴的な事業活動を展開しており、私たちの関心を引くところであるが、ここでは紙幅の都合上、私が3度訪問したSESの事業活動についての情報を本号と次号の2回にわたってルポルタージュ風に認めることにしよう。

実際のところ、今回初めて訪問したNYFVO(1987年設立)は、ヨークを含むノース・ヨークシャーで事業活動を展開しているおよそ1,500のボランティア組織やコミュニティ組織とコンタクトを取っており、それらの非営利・協同組織の経営や管理運営について支援や助言を与えるだけでなく、ノース・ヨークシャー全体にわたる規模で非営利・協同組織セクターのインフラストラクチャーの拡充を目指している指導組織である。この地域には少なくとも3,000以上の非営利・協同組織(コミュニティ・ビジネス、コミュニティ・エンタープライズ、労働者協同組合、チャリティ組織など)が存在し、さまざまなサービスを提供している。例えば、保健・医療、ソーシャル・ケア、レジャー・リクレーション、児童・若者による活動、教育・職業訓練、情報・助言、環境、アート、住宅、経済・コミュニティ開発、文化遺産などに関わるサービスを提供している。そしてこれらのサービス提供におよそ

5万人の人たちが関わり、毎年100万時間以上をこれらのサービス提供に費やしている(因みに、このセクターが提供・供給するサービス時間は毎年約400万時間である)。ノース・ヨークシャーの人口は約70万なので、(幼児から高齢者まで)人口の14人に1人が非営利・協同の活動に関わっていることになる。またこのセクターには約1万2,000人が従事しており、そのうちフルタイムは4,000人で、セクター全体で一つの大きな雇用の機会を提供しているのである。さらにこのセクターの総事業高は(1999-2000年の会計年度で)1億900万ポンド(約218億円)で、ノース・ヨークシャー地域へのGDP寄与率は2.5%にも及んでいる。この地域はイングランドで3番目に所得の高い地域なので、このような地域でのコミュニティ開発やコミュニティの再生、雇用の創出など非営利・協同組織の事業活動について私は大きな関心と興味をもったのである。

また1991年に3人の白人女性の会計士によって設立された、ロンドンの貧しいインナー・シティにおいて着実に業績を高めてきているアカウント3が展開し、実践しているプロジェクトとプログラムにも私は大きな関心と興味を抱いている。私自身はアカウント3の理事長(サービス・マネジャー)であるトニー・メレデューさんと7年ほどの付き合いがあるので、なおさらその活動と

実績に関心をもつのであるが、とにかくこのコミュニティ・ビジネスはユニークであり、私たちに希望を抱かせてくれる非営利・協同組織である。第1に、(協力者としての男性は拒まないまでも)アカウント3の組合員スタッフと利用者(クライアント)はすべて女性であること、第2に、スタッフとクライアントの多数は東南アジア、カリブ海それにアフリカ東南部の国々からの移民であること、第3に、白人女性のクライアントが徐々に増えてきていること、第4に、***Passions: East End Women's Success Stories***と題するサクセス・ストーリイを出版するほど職業訓練の成果を上げていること、第5に、アカウント3とパートナーシップを組んでいる10を超える組織・グループ・機関としてUniversity College LondonやGlobe Town Women's Groupなどの他にMeiji University(つまり、「非営利・協同組織研究会」)が『年次報告』(*Annual Report 2003-2004*)に堂々と記されていること、などである。

したがって、本当のところ、私としては、ここに「NYFVO訪問記」と「アカウント3訪問記」も入れたいのであるが、前に言っておいたように、これら2つの非営利・協同組織への訪問記については紙幅の都合で次の機会に譲るとして、「SES訪問記」を認めることにしよう。

社会的企業サンダーランド (SES) について

SES 訪問記を認める前に、SES について簡単な説明をしておこう。そうした方がこの訪問記を読む人も、実はそれを書く私も新しい状況をよく読み取れるのである。

サンダーランド市のなかでも SES が「雇用の創出」と「コミュニティの再生」のために現在もっとも力を注いでいる地域はヘンドン地区とイースト・エンド地区のコミュニティである。これら2つの地区のコミュニティはサンダーランド市の他のコミュニティに比べても高い失業率や犯罪発生率など人びとの労働と生活にとって厄介な問題に直面している。それだけに、SESにとってこれらの地区での「雇用の創出」と「コミュニティの再生」という目標は、生易しいものではなく、大きな困難を伴うものである。要するに、これらのコミュニティとその住民は「社会的に排除されている状況」にあることから、そこでの「雇用の創出」と「コミュニティの再生」という目標を達成するためには、SESは「長期的なスパン」で計画を練り、実行する観点を堅持しなければならないのである。

そのSESは、1983年に創設された「サンダーランド共同所有制企業資源センター」と名づけられた「協同組合開発機関」(CDA)に起源をもち、サンダーランド市における

住宅協同組合やケア協同組合の展開と関連させながら「雇用の創出」と「コミュニティの再生」に関わる事業を継続してきたが、2000年7月に「社会的企業」のコンセプトを取り入れることによって、その名称を「資源センター」から現在の「SES」へと変更したのである。SESは、この間長期にわたって蓄積してきた事業経験を基礎に、1990年に「ペニウェル・コミュニティ・ビジネス」(PCB)を、また93年には「ヘンドン2000」を立ち上げて、「雇用の創出」と「コミュニティの再生」という厳しく困難な目標に向かって、しかも「長期的なスパン」に立った計画と行動を押し進めた。

現在、SESが大きな力を注いでいるプロジェクトの1つが「ヴァリー・ロード・コミュニティ・プライマリイ小学校」(VRCPS)の発展である。SESは、3～11歳の児童・生徒360人余、スタッフ69人を擁するVRCPSの設立計画から開設、それに運営まで関わっている。校長・副校長をはじめ全スタッフの選考もSES関係者を含めた委員会によって行なわれ、学校運営についてもSESの「コミュニティの再生」というキー・コンセプトが採り入れられている。このようなことは、VRCPSがイギリス初の「コミュニティ立小学校」であるが故に可能なのである。なお、VRCPSの教育、VRCPSとSESの「コミュニティの再生」や「雇用の創出」という目標との関係、私の言う「長期的なス

パン」などについては、私の「レポート」が「コミュニティ再生のための小学校『ヴァリー・ロード』の挑戦」と題して『労協新聞』(2004年8月25日付、No.672・673)に2ページにわたって掲載されているので、その「レポート」を一読していただければ、読者にはVRCPSについてかなりの程度理解していただけたと思うので、是非一読することを勧めたい。そこで以下、SESとVRCPSへの^{みたひ}三度の訪問について記すことにしよう。

VRCPS への訪問

SESの起源を辿っていくと、CDAである「資源センター」の設立者としてジェフ・ドッズ氏とジョン・ブラックバーン氏の名前が出てくる。二人は共に「バンクス・オブ・ザ・ウェア協同組合住宅アソシエーション」の指導者であった。日本と違って、イギリスでは住宅協同組合は事業の点でも地域活動の点でもコミュニティのために重要な経済的、社会的役割と機能を果たすことが共通して見られる。ジェフたちの住宅協同組合も例外ではなかった。そのことは、ジェフとジョンの2人がSESの設立者であったことから十分窺える。

私は(研究会メンバーなど5人の仲間と共に)2002年8月にヘンドン地区にある「協同組合センター」内にオフィスを構えているSESを訪ねた。この時に私たちを案内し、私

たちにSESのプロジェクトやプログラムについて説明してくれたのが、ジェフであり、ジョンであり、ケビン・マークウィス氏であった。またその同じ日に、今ではサンダーランド市があるティン・アンド・ウェア州とドラム州を合わせた「ノース・イースト地域」の非営利・協同のケア・サービス事業に影響を与えている「SHCAモデル」(「SHCA」:「サンダーランド・ホームケア・アソシエイツ」)を創作したマーガレット・エリオットさんが「SHCA」について私たちに詳しい説明を下された。その後、ジェフはVRCPSの工事現場を案内しながら私たちにVRCPSのコンセプトを説明してくれた。私はジェフの説明を聴きながら、VRCPSが「コミュニティの再生」と「雇用の創出」に実際に寄与するのであれば、VRCPSはコミュニティの人たちの理解を得られるだろう、と考えたものである。

私は、翌2003年1月にVRCPSが2002年12月に開校(設立は9月)されたことを知ったので、ジェフとジョンに2003年9月に再度訪問したい旨を告げ、返事を待った。そして間もなくジェフから「来訪を歓迎する」との返事があった。私と研究会メンバーの柳沢敏勝教授(明治大学商学部)と佐藤誠教授(立命館大学国際関係学部)の他2人の5人で予定通り9月5日にVRCPSを再び訪ねた。この訪問時にはVRCPSは通常の授業を行っており、後で記すような内容の説明をクリスティーン・ヤング校長とジョー

ジ・スタッパート(コミュニティ担当)副校長から懇切丁寧に受けた。

私たちの訪問に合わせたSESの「宣伝戦略」はなかなか大したものので、BBCラジオの記者のインタビュー、地方紙『サンダーランド・エコー』(Sunderland Echo)の記者のインタビューと写真撮影、地方情報誌『イーストワイズ』(EASTWISE)の記者のインタビューと写真撮影が私たちを待ち受けていた。ここにその時の『サンダーランド・エコー』紙と『イーストワイズ』誌に掲載された私へのインタビュー記事を記しておこう。

『サンダーランド・エコー』紙(2003年9月6日)から

「日本人の研究者、サンダーランドのもっとも新しい小学校の話題の教育を研究するためにウェアサイドを訪問：中川雄一郎教授は昨日、彼の研究チームと共に、約500万ポンド(10億円)を費やしたヘンドン地区のヴァリー・ロード・コミュニティ・プライマリィ小学校(VRCPS)を訪問した。彼らは調査内容をヴァリー・ロードから日本に持ち帰り、それを日本のコミュニティのための参考に供するつもりである。東京にある明治大学の中川教授がサンダーランドを訪れるのは2度目である。彼はここ10年ほど日本、イタリアそれにスペインにおける現代協同

組合運動を研究してきたが、新たにイギリスにおける運動を研究するようになった。

彼とその研究チームを迎えるホスト役は、1月(正しくは前年の12月・中川)に開校したVRCPSの主要な代表者でもある社会的企業サンダーランド(SES)である。VRCPSはヘンドン地区およびイースト・エンド地区の再生の試みを見守るプロジェクト、「バック・オン・ザ・マップ」(Back on the Map)の支援を受けている。このVRCPSの施設・便益には、生涯学習、健康リビング、朝食クラブ、放課後クラブ(学童保育)、育児・保育グループがあり、また(障害などの)特別なニーズの児童・生徒に対応できる専任スタッフがおり、その対策にも十分備えている。」

『イーストワイズ』誌(2003年10月号)から

「日本人訪問者、ウェアサイドを再訪：昨年に引き続いて来訪した日本の研究チームは、社会的企業サンダーランド(SES)から心温まるウェアサイド式歓迎を受けた。彼らはヴァリー・ロード・コミュニティ・プライマリィ小学校(VRCPS)が行なっている初等教育の革新的アプローチを直接

その目で見えるためにイングランドを訪れたのである。

東京にある明治大学の中川雄一郎教授と彼の研究チームがサンダーランドを訪れたのは、VRCPS 自体だけでなく、VRCPS の主要な代表者である SES についても調査・研究するためである。彼らの再訪は、これらの調査・研究の内容を日本に持ち帰り将来の実践に役立たせる、という目的をもっている。

中川教授はこの10年余り日本、イタリアそれにスペインにおける協同組合運動の研究に従事してきたが、彼の研究チームはイギリスの運動も研究することになった。

この研究チームは、あと3年間日本の文部科学省（日本学術振興会 - 中川）から科学研究費の交付を受けることになっているので、SESを長期にわたってサンダーランド市における成功した協同組合やコミュニティ・エンタープライズの良き実践例として研究するに相応しい、と考えているのである。このチームはまた、社会的企業に関する書物を出版したほど最初の訪問旅行によって大いに鼓舞されたのであり、したがって、今回の訪問の主目的である VRCPS に関わる調査にも大いに熱が入るであろう。

中川教授は次のように述べた：日本における経済的および社会的状態は次第に悪化してきている。失業率は徐々に高くなっており、特に若者の間でそうなっているし、多くの地方のコミュニティは現に社会的に危機的な状態に直面している。日本政府は、それを通じて市民事業や社会的企業が根を張り、成長する一連の政策を展開しなければならない、と私は考えている。とりわけ私が研究を楽しんでいるコミュニティ協同組合と社会的企業は、その最良の政策手段の一つである。

中川教授はさらにこう付け加えた：社会的企業サンダーランド (SES) は、私たちが再び SES を訪問し、さらに調査を深めるほど、私たちの最初の訪問旅行 (2002 年 8 月 - 中川) に対して大きな示唆を与えてくれた。とりわけ VRCPS は、イギリスにおける初等教育ティーチングの素晴らしく刺激的なコンセプトであり、コミュニティ全体を教育に参加させる方法を教えてくれる見事な実例である。私たちはこの小学校を訪問する機会を特別に与えられたことに感謝し、この訪問旅行から多くのことを学ぶことができるだろう。

500 万ポンド以上をかけて設立された VRCPS は、おそらく、バック・オン・ザ・マップのプロジェクト 5,400

万ポンド(108億円)の予算計画によるヘンドン・イースト・エンド地区の『コミュニティ再生プログラム』である『コミュニティのためのニュー・ディール』のもっとも明白な、目に見えるプロジェクトである。イギリスにおける初等教育の進歩的な方法であると既に引証されたこの小学校は今年の1月に授業を開始した。

VRCPSは、各教室(や適切な場所と他の施設 - 中川)にプラズマ・スクリーンとコンピュータを含む技能・技術の教育手段・設備を設置していることから分かるように、生涯学習センター、健康リビング、朝食クラブ、放課後クラブ(学童保育)、育児・保育そして特別なニーズを持つ児童・生徒への専門施設を含んでおり、すべてのコミュニティ住民のために豊かで多様な環境を用意している。

SESのケビン・マークウィス氏は次のように語った：中川教授と彼の研究チームを再び歓迎するのは私たちの大いに喜びとするところですし、私たちは彼らにサンダーランドにあるコミュニティ・エンタープライズの引き続く成功を直接説明することができるでしょう。」

私たちのSES再訪の目的はこのようにし

て記録された。私のこのインタビューが終わると、2時間ほどを費やした、主にヤング校長によるVRCPSについての詳しい説明が始まった。

(次号へ続く)